

財団法人・小峰研究所の足跡

- 大正9年 アメリカ合州国フィラデルフィア市ウイスター研究所への留学から帰った小峯茂之が、精神医学のための研究所設立を企画する。
- 大正13年 The Japanese Journal of Neurology and psychiatry 第1号を発行した。
- 昭和2年 日本における精神衛生の振興推進運動をはかるために、「日本精神衛生協会」の設立を支援した。月刊誌「脳」の発行資金援助を、昭和17年まで行った。
- 昭和5年 小峰研究所紀要第1巻を発行した。
- 昭和6年 小峰研究所紀要第2巻を発行した。
- 昭和8年 小峰研究所紀要第3巻を発行した。
- 昭和10年 小峰研究所紀要第4巻を発行した。
研究所敷地内に、アイヌ博物館を付設した。
- 昭和12年 小峰研究所紀要第5巻「明治・大正・昭和年間に於ける親子心中の医学的考察」を発行した。
- 昭和13年 小峰研究所紀要第6巻「情死に対する医学的考察」を発行した。
- 昭和15年 小峰研究所紀要第7巻「無理情死の医学的考察」を発行した。
- 昭和17年 小峯茂之の死去ののち、金原種光が所長となったが、戦争のため、活動を中止した。
- 昭和34年 金原種光は、西ヶ原病院を創立し、その内に小峰研究所分室をもうけ、インシュリン療法・脳研式性格テストの研究を続けた。

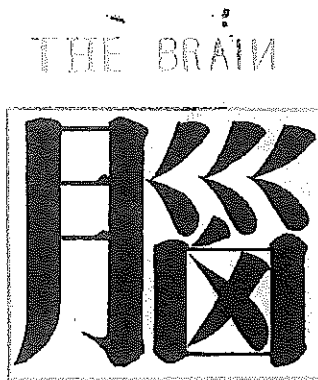
雑誌『脳』：その第1号の発刊は、1927年（大正16）1月1日となっているが、改元があったので、実際は昭和2年1月1日である。

発行者は、小峯茂之（小峰病院長・王子脳病院長・小峰研究所長）で、編集者は、菊地甚一で、発行所は「精神衛生学会」（住所は菊地甚一の自宅）である。

菊地甚一は済生学舎卒業、1914年医師試験合格。巢鴨病院就職ののち精神鑑定を多く手がけ、かねてから精神衛生啓蒙雑誌の出版を考えていた。

『脳』は、1940年（昭和15）10月までつづき、11月から「所謂新体制なる国民運動に即応して、」表題を『精神と科学』と改題した。

1944年（昭和19）3月で終刊となった。



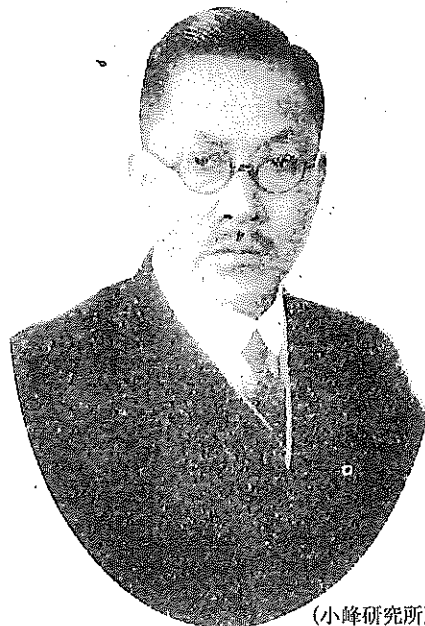
大正十六年一月一日 創刊

創刊號

第一號 第一卷

（東大医学図書館所蔵）

創刊号 脳 表紙



（小峰研究所所蔵）

小峯茂之（1883-1942）

精神衛生協会創立に寄与。救治会、日本精神病院協会でも役員として活躍。1942年（昭和17）10月、日本医師会体制変革のとき、日医常任理事在任中に急死

| | |
|---------|------|
| 現罪少年の智慧 | 成田勝郎 |
| 隨筆と説苑 | 菊地甚一 |
| 常識の酒屋 | 大森洪太 |
| 狐憑の敵討 | 尾佐竹猛 |
| 遠信論 | 橋健行 |
| 蕪篋怪談 | 松崎實 |
| 死別因の語 | 藤澤正 |
| 浪蕪老と信託 | 野村英一 |
| 精神分析 | 丸井清泰 |

| | |
|---------|-------|
| 精神と脳 | 三宅巖 |
| 老性癡呆 | 植松七九郎 |
| 腦の發育 | 小峯茂之 |
| 階級精神 | 藤森成吉 |
| 腦の進化 | 杉田直樹 |
| 女性心理の研究 | 金子準二 |
| 自殺心理の研究 | 後藤城四郎 |
| 屋根裏の感想 | 神近市子 |
| 落葉を焚く | 大塚四十男 |

『脳』創刊号 目次 精神医学者のほかに、作家・評論家の名も見えて多彩である。

近代日本におけるアイヌ文化博物館の成立に関する研究

大塚和義

はじめに

首都東京に1935（昭和10）年、現在のJR王子駅の西側に広がる丘陵に「アイヌ博物館」が建設され、運営されていたことは博物館学の研究者にも、まったくといえるほど知られず、学会誌にも論述されてこなかった。この博物館は、アイヌの母屋をはじめ熊檻など伝統的な生活空間をふまえて復元・設置され、その母屋には、アイヌの人たちの製作による豊富な生活用具が配列展示されるという、本格的なアイヌ文化博物館であった。

本稿は、この北区（当時滝野川区）に設置されていたアイヌ文化の専門博物館である「アイヌ博物館」の存在を紹介し、これがつくられた目的と意義を解明することを主眼としている。

近代国家日本と博物館の創設

近代日本は、欧米列強の進んだ科学技術のうえに殖産振興に力をそそいで強力な国民国家体制の確立を急いでおり、その実現には国民教育が重要であると認識していた。明治新政府では、1860（万延元）年に幕府が派遣した遣米使節や1863（文久元）年の遣欧使節、1867（慶応3）年パリ万博への派遣組など、欧米を実見し学んだ者たちの新知識や経験が国家建設の原動力となった。

文化施設についても、パリ万博に派遣された物産学者の田中芳男が、薩摩藩の留学生としてイギリスに渡り、同じくパリ万博の見学も行なっている町田久成とともに「博物館」創設へと力を注いだ。パリ万博だけでなく、ワシントンのスミソニアン博物館やロンドンの大英博物館なども視察した田中・町田らは、国会議事堂や国立図書館とならんで博物館・美術館の設置が国家のシンボリック的装置として不可欠な施設であることを強く認識した。またこれらの施設が新政府の首都東京に設置されるべきと考えたことも、欧米の視察をふまえた当然の帰結であったといえよう。

ところで、博物館の設置場所として選ばれたのは、寛永寺や東照宮などが設けられていた旧幕府権力にとっての重要な聖地である上野の台地であった。いうまでもなく上野台地は、江戸城からみて家康を祀った日光東照宮の方角に位置しており、歴代将軍の墓所ともなっていた。この上野台地に、明治政府が国家の文化的象徴として博物館施設を建設したことは、広く国民大衆に旧権力の消滅を印象付けるという側面が存在したと考えたい（大塚1995）。

近代国家日本におけるアイヌ政策

明治以前、北海道島は蝦夷地と呼ばれ、この地を支配した松前藩は、松前周辺のみ狭い「和人地」と呼ばれた土地に居住ができただけで、アイヌ人が居住する「蝦夷地」の専有は家康以来認められず、蝦夷地の土地と資源は基本的にアイヌに属していた。

松前藩は、アイヌが生産する昆布などの海産物や鹿・熊・アザラシ・ラッコなどの毛皮、それにアイヌが大陸との交易で手に入れる中国製の絹製品やガラス玉などの「蝦夷地産物」をアイヌとの交易によって入手し、それを本州各地に転売することで利益を得て藩財政を維持していた。ちなみに江戸後期、本州で舶来品や珍品などの見世物興行が盛んに行なわれたが、優れた工芸技術によるアイヌの生活用具の一部も並べられている。

蝦夷地のアイヌに対して幕府は、その存在や伝統的文化を否定する施策を積極的には行なわなかったといえる。アイヌを通して蝦夷地の産物が入手できればよかったからである

(大塚 2003)。

一方、1868年に成立した明治政府は、翌年、北海道に開拓使を設置し、豊かな資源の収奪である「開発」を大規模に展開するために本州資本とこれに従事する大量の移民を送り込んだ。そして、伝統的な居住地であった北海道島を中心とする日本列島北部地域に先住してきたアイヌを日本国民として日本の国家領域に囲い込み、日本語や文化の強制を、学校教育をとおして行なうなど同化政策を強行した。しかも、アイヌ語で「人間」を示す「アイヌ」という自称を否定し、野蛮・未開をイメージする「旧土人」という身分で戸籍に記載したのである。アイヌに対して伝統的な風俗や民族語であるアイヌ語の持続を妨げながら日本語をはじめとする日本文化を強制し、そのうえ、彼らの歴史的な生活の場であったアイヌモシリ（人間の大地）を無主地として収奪した。

生活の糧を得る漁場や狩猟の場などをほとんど失った結果、アイヌは生活に困窮し、その悲惨な状況は海外のジャーナリストなどによって報道された。海外からの批判をあびた日本は、1899（明治 32）年にアイヌ救済と称して「北海道旧土人保護法」を公布した。しかし、2年後の1901年に設置された土人学校ではアイヌ文化の学習はまったくなく、日本語の識字学習を基本とする皇民化教育が行なわれた。

明治政府によるアイヌの表象

開拓使に始まるアイヌ文化否定の同化政策のもと、一方でこの同化とは一見相反する行為も政府は行なった。殖産振興をかけた欧米列強に伍しようと企図する政府は内国勸業博覧会や海外の万国博覧会などにアイヌを「原始生活を営む未開民族」として人間そのものを「展示」した。そこでは、和人に同化した姿ではなく、「伝統的」文化とその生活のありようが、むしろどぎつく原始性を誇張された形で演出された。当時の新聞はもとより、各種刊行物や多くの絵葉書が発行されたが、この絵葉書は「やらせ」の姿が大部分であり、これらから受ける一般和人のアイヌに対するイメージは、野蛮・未開なる人間との出会いというマイナスに作用し、アイヌを民族的に劣等なものとして差別する意識・風潮を拡散させたのである（大塚 1996）。

このアイヌを博覧会などで展示する手法は、欧米列強が自国の版図の広大さと威信を示すものとして、また植民地支配を誇示する手段としてさまざまな植民地の人たちを博覧会等の場において展示してきた例を習ったものであった。

展示される側の人たちも、反対の意思を示さなかったわけではない。1903（明治 36）年、第五回内国勸業博覧会が大阪で行なわれ、そこでアイヌをはじめ琉球・朝鮮・台湾・中国などの「人間の展示」が人類学者の企画によって実施されたが、これに異議を唱えた琉球・朝鮮・中国の人たちの展示は途中で中止されるに至るといふ、いわゆる人類館事件が起こっている。このときアイヌの人たちも展示に対して批判の気持ちをもってはいたが、土人学校の運営資金を得る必要性ゆえに耐えねばならなかったようである。このようなアイヌの展示は1893年のシカゴ万博や1910年ロンドンでの日英博覧会など海外でも行なわれている。そして1912（大正元）年の明治記念拓殖博覧会では、日露戦争で領有した南樺太の先住民オロッコ（現ウイルタ）・ギリヤーク（現ニヴフ）とともに樺太アイヌが展示された。

これらの展示は当時の専門的人類学者が関与していたが、展示される人たちはあくまでも見世物としての役割を演じさせられており、そこには、異なった文化を対等な立場でみるという今日的な視点はみられない。

東京における「アイヌ博物館」

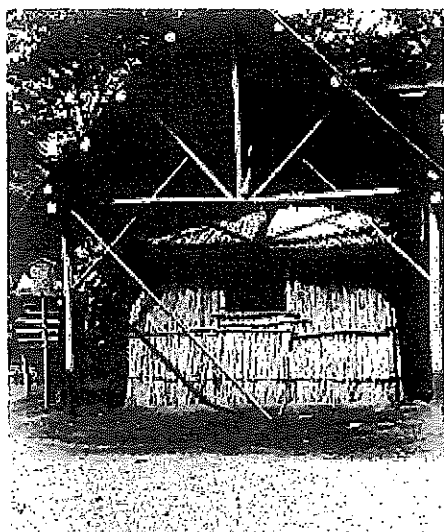
このようなアイヌに対する視線やアイヌに対する政策に、とりわけ大きな変化がみられたわけではない中、1935（昭和 10）年の東京北区（当時滝野川区）王子の病院内に、学問的関心からアイヌの母屋をはじめ熊檻など伝統的な生活を営んでいた時代の生活文化が復

元され、アイヌの人たちが製作した豊富な生活用具を家屋内に配列して公開する「アイヌ博物館」が設置されたのである。この、東京における「アイヌ博物館」設置の事実は、研究者の間でもほとんど知られてこなかったが、今回これを少し詳しく紹介したい。

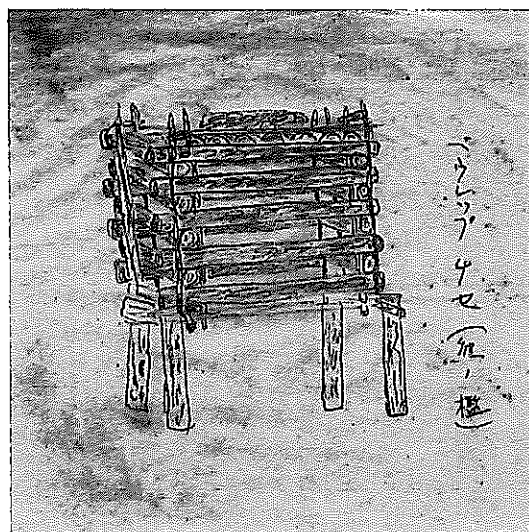
病院長の小峯茂之博士は、精神科医として診療に携わる傍ら、財団法人小峯研究所を設置して自殺などさまざまな精神病理をテーマとする研究報告を出版し、またアイヌについては、アイヌの人たちの中にみられる異常な行動や発声を伴うイムと呼ばれる現象に関心をもって専門的見地から研究を行っていた。このイムの研究でアイヌの人たちとの交流が進められ、博物館の建設にいたったと考えられる。また小峯博士は、自身の経営する病院の敷地内に縄文時代の西ヶ原貝塚があり、先史時代の文化にも興味をもたれていたことも、後に述べる理由から、博物館を建設する動機となっている可能性がある。



第1図 アイヌの母屋と熊檻



第2図 覆屋をつけたアイヌ家屋
(消失する昭和20年ころ 母屋の傍らに設置)
建設直後のスケッチとみられる(筆者不明)



第3図 熊檻の図

このアイヌ博物館は、当時開館直後に文部省社会教育局内に事務局が置かれていた日本博物館協会発行の『博物館研究』8巻12号(昭和10年12月1日発行)の「博物館ニュー

ス」欄に「アイヌの家」と題して概略次のような記事と写真（第1図参照）が載せられている。

小峯博士が北海道から呼び寄せたアイヌに写真のような家屋を建ててもらい、その内部にアイヌ民具を配列しひとつの家屋博物館として11月1日から公開した。前日のラジオで放送された効果は大きく、忽ち数百人の観客が殺到した。

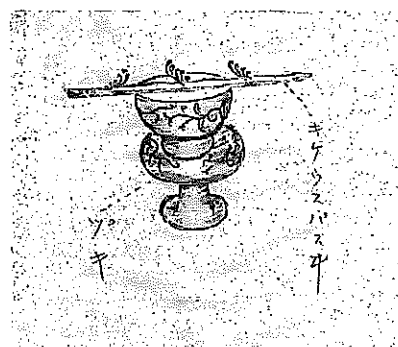
また、当時の新聞記事（新聞名不明、昭和10年10月20日）によれば、

このアイヌの家は14尺7寸5分×8尺5寸、エンジュの丸太柱を土中に埋め、屋根はアシ葺き。さて、この家ができたといいてもアイヌが東京に移住したのではない。院長の小峯博士が風変わりな人で「先住民族の遺跡を一つぐらい東京につくる義理がある」といってわざわざ北海道からアイヌを呼んでつくったのがこの珍しいアイヌの家だ、とあり、大きく母屋の写真を掲載している（第1図に近似したもの）。

小峯博士は、病院敷地内に存在する先住民の残した西ヶ原貝塚を形成したのは、縄文人＝先住民族＝アイヌであるという考えをもっていたと推測され、このアイヌの家も「先住民族の遺跡」につながる構築物と位置づけていたことがこの記事から窺える。

家の中に配列されたとみられる民具は、衣食住および儀礼に関するもので、用具約60種類100点余りの名称が記された、アイヌの人からの購入を実施したことを示す当時の購入リストが存在する（第4図参照）。これらの民具資料はすべて現在の北海道沙流郡平取町本町のアイヌの人から購入されたものであることがわかっている。そして実際に施行を請け負ったのは病院の存在した西ヶ原町の櫻井工務所であるが、おそらくこの資料の売主が家屋を建てる際にも現場で指導したと考えられる。このアイヌ家屋は、すでに記したように、1935年11月1日に一般公開されたが、その後の正確な運営状況は不明である。また、惜しむらくは、1945年4月13日の空襲によりこのアイヌ家屋ならびに付属施設は焼失してしまった。茅葺の家屋は雨風による劣化を受けやすく、そのため覆屋を設けており、消失直前まで維持管理がなされていたことを窺い知ることができる（第2図参照）。

少なくともアイヌの家屋が10年間は保全され、地域の博物館としての役割を果たしたということとは重要である。



第4図 母屋内部に配置されていたカムイノミ儀礼の漆器とイクパスイ（捧酒箸）

国立民族学博物館が1980年代に小峯研究所より寄贈受け入れおよび一部購入したアイヌ民具資料は約40点であり、おそらく、「アイヌ博物館」における配列資料全体からみると半数以下となろう。資料は、アイヌの家で使われてきた年代を経たものや、家屋建設当時新たに製作されたとみられる使用痕のないものも含まれている。「アイヌ博物館」と書かれた木製の表札も含まれている。また、アイヌの帆をかけた丸木舟の模型があり、櫂やあか汲みなどの付属品もつけられている。資料の内容の詳細については稿を改めて公表する予

定である。

アイヌ家屋の建設指導にあたったアイヌの方々のなかで、萱野茂氏のご教示によって氏名が明らかになったのは、平村幸雄、平村栄吉の2氏である。ほかに2名の男性の男性と1名の女性が、落成式当日とみられる記念写真には写っている。今後、可能なかぎり聞き取り調査を進めていきたい。

博物館学的視点からみる「アイヌ博物館」の意義

このアイヌ博物館では、調度品やイナウなどの儀礼用具、そして衣服や装身具類など、一軒のアイヌ家屋に備わるほとんど全ての生活用具を網羅するという本格的な計画に基づく資料収集が行なわれたことが窺われる。残された資料リストに価格が未記入のものは、未購入資料であると判断される。このようなアイヌ家屋と付属施設、ならびにそこで用いられる用具類がほぼ完全に収集・展示された事例は、筆者の知るかぎり、この東京市滝野川区（現北区）王子に設置されたアイヌ博物館が日本で最初のものである。

戦前、つまり1945年以前に北海道においてもこのような充実した内容をもつアイヌ家屋と民具資料展示の存在は確認できていない。1949（昭和24）年1月、日本民族学協会は附属民族学博物館が存在した東京都北多摩郡保谷町下保谷にアイヌ住家建設の決定をし、翌1925年3月25日に落成式を行なった。北海道沙流郡平取町二風谷の二谷国松氏らによって母屋・納屋・熊檻・祭壇・倉庫・男女の便所の計7棟が建てられた。建築に伴う諸儀礼の記録は知里真志保氏が行なった。落成式当日には陳列場においてアイヌ民具特別展覧を行なったと、記録されている（宮本 1985）。しかし、この家屋内には生活用具が揃って配列されてはいなかった。ちなみにこの保谷のアイヌ家屋はときおり研究者をはじめ一般の人たちも見学したと宮本馨太郎先生よりお聞きしている。日本民族学協会が所蔵していたアイヌ資料を含む民族資料は、現在国立民族学博物館に移管されて所蔵されている。

現在ではアイヌ家屋と民具資料が配列展示された事例はかなりの数にのぼる。北海道の観光地である登別温泉、白老アイヌ民族博物館、そして愛知県犬山市の野外博物館リトルワールドなどで野外展示され、北海道開拓記念館、旭川の川村カネト記念館、二風谷アイヌ文化博物館、大阪人権博物館、国立民族学博物館などではアイヌ家屋の館内展示をみることができるようになっている。

このようにみえてくると、明確にアイヌ文化を紹介する目的でつくられた博物館施設のアイヌ家屋としては、沙流川の中流に位置する平取町の平村幸雄氏らの手によって1935年に東京王子の西ヶ原病院内につくられた「アイヌ博物館」が、もっとも早い時期のものであると考えられる。現在判明した情報を取り急ぎ本稿に記したが、残された図面や写真資料をもとに、より詳細な調査を継続する所存である。

なお、「アイヌ博物館」設置が地域住民や一部研究者に対してアイヌ文化を紹介する場とはなっていたが、その博物館活動が積極的に行なわれなかったのは、小峯茂之博士の専門とする精神医学の視点からアイヌ伝統の精神的世界の知見を身近に学ぶ施設とすることに重点が置かれ、一般に向けた博物館機能に不可欠な人員配置や集客という視点はなかったことに起因しているようである。

今後の検証に向けて

最後に、「アイヌ博物館」建設についての調査にともない浮かび上がった、今後追及すべき課題の一視点について記しておきたい。

小峯博士が「アイヌ博物館」建設を意図し、実行した時期は、軍国主義化が進み、左翼思想に対する弾圧や検挙が激しくなった時期であり、東北地方は博物館建設の前年、1934（昭和9）年に凶作で娘の身売りが起きるなど生活苦の惨状もみられる反面、軍需景気が高まっていた。この1934年10月には日本民族学会（会長白鳥庫吉）が設立されている。ま

た開館の翌年の1936（昭和11）年には、柳宗悦らによる日本民藝館が東京の目黒区駒場に開館した。小峯博士が親しくしていた東京大学医学部の秋元波留夫博士は、北海道大学医学部内村祐之博士の影響を受けてアイヌの人たちにみられる心理的現象であるイムに関心をもって、イムを研究テーマのひとつにしており、この秋元博士の協力によって「アイヌ博物館」建設は実現した。柳宗悦の提唱する民芸運動に加わって大きな役割を果たした精神科医の式場隆三郎博士と、小峯・秋元両博士らは同じ精神科医であり、接触は容易であったとみられる。「アイヌ博物館」建設に協力したアイヌの平村幸雄氏は、戦後、民芸運動に参加してアイヌ民芸品を製作し、日本民藝館などで販売している。

こうした諸状況と人の動きを丁寧にたどっていくことによって、小峯茂之博士が「アイヌ博物館」建設に力を注いだ原点が明らかになるであろう。

本研究は、財団法人小峯研究所の助成による成果の一部である。記して謝意を表する次第である。

参考文献

- 大塚和義 1995 『博物館学Ⅱ—現代社会と博物館』放送大学教育振興会
大塚和義 1996 「アイヌにおける観光の役割—同化政策と観光政策の相克」石森秀三編『観光の二〇世紀』ドメス出版
大塚和義 編著 2003 『北太平洋の先住民交易と工芸』思文閣出版
東京国立博物館 編 1973 『東京国立博物館百年史』東京国立博物館
宮本馨太郎 1985 『民俗博物館論考』慶友社